

# 初期のリア王物語 三篇

福 井 秀 加

## 序

シェイクスピアの四大悲劇の一つとして知られている「リア王」の物語は、その原型をたどると love-test を主題にした民間伝承の古い民話に溯るといわれる<sup>①</sup>。

しかし、「リア王」の物語がしるされている文献で我々が知るところの最も古いものは、イングランドのモンマスシャーにゆかりのある学問僧ジェフリ・オヴ・モンマス <Geoffrey of Monmouth> が 1136 年頃にラテン語で書いたブリトン歴代の王の年代記「ブリテン諸王の歴史」*Historia Regum Britanniae*<sup>②</sup> である。

ジェフリはウィリアム征服王より三代目のヘンリー一世の治世に筆をとり始めた。イングランドに渡ったノルマン王家の貴人に献呈するために、この島の古い歴史を編纂したのである。ジェフリはアングロ・サクソン族がイングランドへ渡る以前からこの島に定住していたブリトン人の歴史から筆をおこした。必ずしも史実によったのではなく想像による創作の面が多い。ブリトン人は昔、トロイの戦禍を逃れ、流浪の旅と戦の果てにこの地に憩を見出した、イーニラス <Æneas> の曾孫、ブルータスの子孫と考えられていた。ブルータスはブリトン人の初代の王であった。「ブリテン諸王の歴史」にはブルータスより数えて十代目の王にリア王の名前が現われる。

ジェフリの著わしたこの書物は大層人気を呼び、大いに流布されたものと思われる。その事情は凡そ二百本<sup>③</sup> に及ぶ写本が現存していることによっても容易に理解ができよう。そしてこの書に著わされた、歴代の王の物語の中の一つであった「リア王物語」は紆余曲折をたどりながら、ジェフリから後世の人びとへと伝わっていった。

ジェフリがリア王の話の骨子に使用した民話の love-test story とはどのようなものであったろうか。広くベルギー、フランス、ハンガリア、カタロニア、ローマ、シシリーなどにその類似の物語があったと言われている<sup>④</sup>。

王に三人の娘がある。王は娘達にどれ程父を愛しているかと尋ねると、二人の姉嬢は父王の気に入るような返事をする。三番目の娘は「父王を塩のように愛しております」と答えて父の機嫌を損じそのために追い出されてしまう。しかし身をやつして召使となり働いている所をある王子に求愛される。父王はやがて塩の入らない食事を食卓に供された時、はじめて娘の言葉を理解し、父嬢は和解する。という大体の筋書でハッピーエンディングである。ジェフリはリヤ王という名前とこの三人娘の話をつぎ合わせた。そして幸福な話の結末を悲劇に終る話に作りかえたのである<sup>⑤</sup>。A. Griscom & R. E. Jones が刊本の底本とした *Historia Regum Britanniae* の写本、MS. University Library, Cambridge, No. 1706 にはリヤ王の物語がおよそ七葉にわたって格調高いラテン語でつづられている。シェイクスピアの「リア王」が著わされるより 470 年も以前に書き上げられたジェフリの「リア王物語」は、シェイクスピアの悲劇の傑作「リア王」の資材の肝要な全てをすでに具えてい

るといっても過言ではない。チェフリのリア王からシェイクスピアのリア王が生まれるまでの系譜には話の伝達にたずさわった60篇に近い物語があると考えられているが<sup>⑩</sup> シェイクスピアが実際にチェフリのラテン語の *Historia* を知っていたのかどうかは明らかではない。しかしこの両者の間には、洗練された心理描写によってえがき出された人物像の不思議なまでの類似が認められる。

この小論ではイングランドで作り出された最初のラテン語のリア王物語がひとまず英語になるまでの初期の過程をとり上げたいと思う。即ちそれは：

- ① Geoffrey of Monmouth の *Historia Regum Britanniae* と
- ② Wace の *Le Roman de Brut*<sup>⑪</sup> と
- ③ Layamon の *Brut*<sup>⑫</sup> の中にあらわれたリア王の話である。

多数の読者を得ていたに違いない名作の *Historia* はチェフリの死後間もなく、ジャージー島 (Jersey) 出身のノルマンの詩人ワース <Wace> によって古フランス語 (アングロ・ノルマン期) に訳され<sup>⑬</sup>, 1155年頃イングランドの時の王ヘンリー二世の後エレノール <Eléonore> に献呈された<sup>⑭</sup>。プランタジネット王家のヘンリー二世の宮廷では、全てがフランス語であったと思える。ワースはラテン語の教養に不足している多くの宮廷人のために、そして更に多くの周囲の人々のために *Historia* をロマンス語 (romanz) に訳したのであろう<sup>⑮</sup>。ワースの「ブリュ物語」*Le Roman de Brut* はチェフリの *Historia* のかなり忠実な翻訳である<sup>⑯</sup>。octosyllabic couplet で14866行の詩行につづられている。その中でワースはリア王の物語に 412 行を割いている。ワースの「ブリュ物語」はその後 50 年を経て 1205 年頃、中英語 (Middle English) に翻訳された。フランス大陸での領地を失ったということが契機となって、イングランドの人々の間にイギリス人としての国民的意識がめざめ始めた頃である。ウェールズとの国境に近いウスターシャ北部のアーンリ (Ernley) の教会の僧侶ラヤモン <Layamon> がイングランドの人々の事績を顕わすために書いたという<sup>⑰</sup>。アングロ・サクソンの伝統の古い頭韻も用い、couplet も用いて West-Midland 方言で書かれてある<sup>⑱</sup>。ラヤモンの「ブルート」は hemistichs で長さはワースの詩行の倍、322241 行である。これは「ブリュ物語」の極めて自由な訳であり<sup>⑲</sup>、物語の進行に会話を多くとり入れたり、挿話をつけ加えたりして詩行を長くしている。この中のリア王物語には 876 行が割かれている。

さてこれらの列王年代記の中の初期のリア王物語がラテン語よりアングロ・ノルマンを経由して英語に至る径路でどの様に変貌し、又それぞれがどの様な特徴を持っているかを明らかにするために三つの物語からの引用を対照してみよう。物語の中心人物であるリアとコーデリアに焦点をあてて人物像の変容をたどってみようと思う。

## (1) 愛の証の場面—リアとコーデリア

### (a) Geoffrey of Monmouth

チェフリのリア王は年老いて、領地を三人の娘に分割しようとする。王は末娘のコーデリアをとりわけ愛しているのだが一層良い領土 (parte potiore) を与えるのには誰がふさわしいか知ろうとて娘たちに誰が一番自分を愛しているかと質問をする。姉娘二人はお世辞 'adulatio' を使って $\frac{1}{3}$ ずつの領土をまず父より約束してもらう。末娘のコーデリアは父をためそうとして、心持よく響く言葉は言わない。そのために領地は貰えないことになる。以下は父王の質問に答えるコーデリアと、その答えを聞いた父、リア王の描写である。

At cordeilla iunior cum intellexisset eum predictarum adulationibus acquieuisse temptare illum cupiens aliter respondere perrexit. Est uspiam pater mi filia quæ patrem suum plus quam patrem presumat diligere? Non reor equidem ullam esse quæ hoc fateri audeat, nisi iocosis uerbis ueritatem celare nitatur. Nempe ego dilexi te semper ut patrem, & adhuc a proposito meo non diuertor. Et si ex me magis extorquere insistis, audi cercudinem amoris quæ aduersum te habeo; & interrogationibus tuis finem impone. Et enim quantum habes, tantum uales, tantumque te diligo. Porro pater iratus eam ex abundantia cordis dixisse uehementer indignans, quod responsurus erat hoc modo manifestare non distulit. Quia in tantum senectutem patris tui spreuisti, ut uel eo amore quo me sorores tue dedignata es diligere, & ego dedignabor te nec unquam partem in regno meo, cum sororibus habebis. Non dico tamen cum filia mea sis quin te alicui externo si illum fortuna obtulerit utcumque maritem, Illud autem affirmo, quod nunquam eo honore quo sorores tuas maritare laborabo. Quippe, cum te plus quam ceteras huc usque dilexerim, tu uero me minus quam cetera diligas.

Griscom ed. *Historia* pp. 263—264.

(しかし年下のコルディラは父が姉娘たちの御世辞で満足したのを知りますと、違ったやり方で父王の心を惹こうとして、答えを進めました。「御父上、自分の父を父親である以上に愛していると考えた娘がどこにおりましょう。そのような事を敢えて言う様な娘が一体全体あるとは思いません。冗談まじりの言葉で真実を隠そうと努めるのでもなければ…。私は貴方様を常に父として愛してまいりました。そして今まで私の考えは変わってはおりません。若し私からこれ以上のことを強いてお求めになりますのなら、貴方様に対して私が抱いている愛のあかしを御聞きなさいませ。そして貴方様の質問をお終いにして下さいませ。まことに貴方が御持ちの分だけ貴方は価値がおありなのですし、それだけ私は貴方様を愛するのでございます。」彼女が心の思いのたけを話したのだと、腹立たしく思っていた父王はますます激怒して、そのためにこのように答えざるを得なかったのです。「お前は父親の年老いたことをこれほどまでに軽蔑してお前の姉たちと同じほどにも私を愛そうとはしない。ゆえに私もお前を厭い、姉たちと同様には私の領土の一部を与えぬぞ。しかしながらお前も私の娘である。だから運命の神が選ぶなら、国の者ではなく見知らぬ者にならお前をくれてやらぬでもない。お前の姉たちと同じような榮譽をもって結婚させるのではないことを覚えておくように。ほんとうにこれまでお前を姉たちより以上に愛してやったが、お前は実に、あの者たちより私を愛してはいないのだ。）」

コルディラ（コーデリア）は末娘でありながらまことに堂々としていて父王に立派な答えをする。姉たちの言葉を軽々しく信じてしまった父王のあやまちに対して謎のような言葉で警告を与えている。‘Et enim quantum habes, tantum uales, tantumque te diligo’（実際、貴方は持っていらっしゃるだけその価値があり、私はそれだけ貴方を愛します。）というコルディラの答えには自分を軽蔑すべき者であるかのように見せかける皮肉がある。そして全てを与えるのは危険だと仄めかす。一方、姉たちの不純な愛の告白を明らかに暴露せず、そのように大げさなことを言うのは冗談である、父親としてより以上に父を愛するなどと言える娘はないはず、と批判を含みながら姉は冗談を言ったのであろうと

彼女たちに逃げ道を与えている<sup>⑩</sup>。この答えによって コルディラが、末娘ではあってもすでに女王の資格にふさわしい品位と気性をそなえていることは明らかであるがリア王はそれを見抜くことが出来ない。彼女の言葉を表面通りに受取って「お前は私を軽んじた ‘dedignata’, ゆえに私もお前を軽んじて ‘dedignabor’ 姉たちと同様には取扱わぬ。」と大人気なく皮肉混じりの竹箆返しを実行してしまう。

コルディラの卒直な飾らぬ答は父王が彼女の真意を理解してくれるであろうと考えた、娘ならでの甘えからくる厳しい言葉である。「愛のあかしを御聞き下さい。そして質問はお終いにいたします。‘audi cercudinem [certitudinem と variant をとる] amoris quae aduersum te habeo & interrogationibus tuis finem impone.’ と開き直ったところに出てきた言葉は父王にとっては、生意気で忘恩ともとれる、あまりにも即物的な ‘quantum habes, tantum uales...’ であった。

一番目をかけて、いとしく思っていた娘の意外な答に、真意を理解せぬ父王が感情的な激しい怒りをばくはつさせるのは当然であろう。「お前を誰よりも愛してやったのだが…。」と嘆きを抑え切れずにふと洩らし、しかし辛辣な答をすぐさま投げ返したリア王の心情をジェフリは見事に描出している。このリアとコーデリアの緊張した場面、心理描写のたくみは後年のシェイクスピアの場面に決して劣るものではない。

ジェフリのコルディラの純粹な、しかし生意気ともとれる態度はシェイクスピアのコーデリアにその佛を残していると考えられる。シェイクスピアのコーデリアが父王に対して答える ‘nothing’ という一言にはコールリッジが Shakespearean Criticism の中で指適したように ‘...some little faultly admixture of pride and sullenness...’<sup>⑪</sup> がみられるのであるがこのコーデリアの姿は、ジェフリの画いたコルディラの像と重なり合う面を持っている。

#### (b) Wace

ワースのリアとコーデリアはどのように描かれているのであろうか。

Cordeille out bien escuté  
 E bien out en sun quer noté  
 Come ses dous sorors parlouent,  
 Come lur pere losengouent.  
 A sun pere se volt gaber  
 E en gabant li volt mustrer  
 Que ses filles le blandisseient  
 E de losenges le serveient.  
 Quant Leir a raisun la mist  
 Come les altres, el li dist :  
 “U ad nule fille qui die  
 A sun pere par presoncie  
 Qu’ele l’aint plus qu’ele ne deit ?  
 Ne sai que plus grant amur seit  
 Que entre enfanz e entre pere,  
 U entre enfanz e entre mere.  
 Mes peres iés, jo aim tant tei

初期のリア王物語 三篇

Come jo mun pere amer dei.  
E pur faire tei plus certain,  
Tant as, tant vals e jo tant t'aim."  
A tant se tout, ne volt plus dire.  
Li peres fu de mult grant ire ;  
De maltalent devint tut pers,  
La parole prist de travers :  
Co quida qu'ele l'escharnist  
U ne deinnast u ne vulsist  
U pur vilté de lui laissast  
A reconuistre qu'ele l'amast  
Si come ses serors l'amoent  
Qui de tel amur s'afichoent.  
"En despit, dist il, eü m'as,  
Ki ne vulsis ne ne deinnas  
Respundre come tes serors.  
A eles dous durrai seinnurs  
E tut mun regne en mariage,  
E tut l'avront en heritage ;  
Chescune en avra la meitied.  
Mes tu n'en avras ja plein pied,  
Ne ja par mei n'avras seinnur  
Ne de tute ma terre un dur.  
Jo te cheriseie e amoue  
Plus ke nule altre e si quidoue  
Que tu plus des autres m'amasses,  
E ço fust dreit, se tu deinnasses.  
Mais tu m'as regeï a front  
Que meins m'eimes qu'eles ne font.  
Tant cum jo t'oi plus en chierté,  
Tant m'eüs tu plus en vilté.  
Jamais n'avras joie del mien,  
Ne ja ne m'iert bel de tun bien."  
La fille ne sout que respondre ;  
D'ire e de hunte quida fundre.  
Ne volt vers sun pere estriver  
Ne il ne la volt escuter.

*Le Roman de Brut*, ll. 1723—1776.

(コルディルはしっかりと聞いており、姉たちがどの様に話し、どの様に父を欺いたかをしっかりと心にとめました。父王にふざけて話しかけながら冗談のようにして父に示そうといたします。姉娘たちが父を嬉しがらせており、甘言をもって仕えているということ。

レイル王が他の者たちにしたと同じように彼女に話しかけますと彼女は申しました。「当然愛さなければならないそれ以上に父親を愛しているのだと、思い上って自分の父に言う娘がおりますでしょうか。子供と父親、あるいは子供と母親との間にある以上の大きな愛が存在するとは思いません。貴方は私のお父上です。私は貴方様を、私が父親を愛すべきであるように愛しております。もっと確信していただくために言えば、貴方は多くを持っておられますし、大層価値がおありですし、私は大層貴方様を愛しています。」それから口を閉じてもう何も言おうといたしませんでした。父王は大層怒り、憤慨してまっさおになりました。言葉を悪く取ったのです。彼女が父王を侮り、姉たちが自ら断言したそのような愛で父を愛することを、父への嘲りのゆえに認めようとしないうか、あるいは敢て愛しようとしないうか、あるいはそれをのぞまないか、であると考えました。「お前は私を軽蔑しているのだ。」と王は申しました。「お前の姉たちと同様に答えようもしないし、それをのぞまない。彼女たち二人には主人をさずけてやり、結婚に際しては私の領土を与えよう。そして私の領土の全てを相続するように各々に半分ずつを与えることにする。しかしお前には何もやらぬぞ。私からは婿殿もさずけてやらぬし片手一杯の土地もやらぬ。私はお前を可愛がり誰よりも愛してきた。お前は誰よりも私を愛してくれていると思っていた。そうであったのならよかったのだが。しかもお前は姉さんたちが愛しているほどには愛していないと、ぬけぬけと言っておった。私がお前を可愛がれば可愛がるだけお前は私を侮っていたのだな。も早私の領土から喜びは得られぬぞ。お前が幸せになるのなど全然気に入らぬ。」娘はどう答えてよいか分かりませんでした。腹立ちと恥ずかしさで消え入りそうでした。口答えしようともいたしませんでしたが父王はもう聞く耳を持たなかったのです。

ワースは *Historia* をかなり忠実に *Roman de Brut* に翻訳したのであるが、このリア王物語のレイル王とコルディルは、ジェフリの人物とは異ったイメージを読者に与えている。父王が姉たちに与えたと多分同様の質問、「Fille, jo vuil saveir cumbien tu m'aimes, di mei veir.」(ll. 1687—8.)をコルディルに与えた時、彼女は気まじめに答えずにふざけた態度でもって話しながら冗談めかして父にわからせようとする。ジェフリの 'temptare illum cupiens aliter' という句、「つまり姉たちとはちがったやり方で自分を理解してもらい、味方になってもらいたいと望んで……」これは訳されなかったのである。そこでふざけて父に語りかけ云々 '... A sun pere se volt gaber/E en gabant li volt mustrer' (ll. 1727—28.) という描写をワースは入れたと思える。そのために 'nisi jocosus nerbis veritatem celare nitatur' (真実を冗談でかくそうとでもしないかぎり) というコルディラの巧みな答は 'par presoncie' (思い上って) という響きの強い言葉をもった答 'U ad nule fille qui die/A sun pere par presoncie/qu'ele l'aint plus qu'ele ne deit?' (ll. 1733—35.) にかわった。これらの言葉の操作によってコルディルはどのように変貌したろうか。ジェフリの物語では非の打ち所のない淑女であったコルディラが、ワースの物語では初々しい娘らしさを現わしてはいないだろうか。冗談のようにして父王に話しかけ、そのことによって姉たちへの非難のほこ先を和らげようとしてしているような娘らしい策略はジェフリのコルディラの over-subtle な答とは異質なものである。「冗談でもない限り……。」とコルディラが巧みすぎる程に姉をかばうのに対して「思い上って言わない限り……。」と直接姉を非難する言葉を思わず口にしてしまうコルディルの tactless な有様には、末娘の一

生懸命な清純さが感じられる。

コルディラの謎のような言葉, *quantum habes, tantum uales* はジェフリの独自のものではない。類似の表現はキケロやプラウタスに既にみられるものであったがこれをワースは *tant as, tant vals e jo tant t'aim* と *tant* を並列して訳出し, コルディルの言葉とした。このフランス語の言い回しもきまり文句であるらしい<sup>⑩</sup>。 *tant* ~ *tant* を *tantes* ~ *quantes* のように相関語句として, ジェフリの構文直訳の意味をとることはできる。しかし, 「大層たくさんお持ちですから, 大層価値がおありだし, 大層愛しています。」という並列的な言葉はジェフリの表現よりもぎこちなくてかえってコルディルの困惑している様子をよくあらわしているとも思える。言い切ったあとはぽつんと黙ってしまい, 弁解しようもしない。ワースのコルディルには若々しくて生一本な娘のイメージがある。コルディルの言葉 '*Mes peres iés, jo aim tant tei/Come jo mun pere amer dei.*' (ll. 1739—40.) はシェイクスピアのコーデリアの '*I love yon Majesty/According to my bond; no more no less.*' Act. 1. sc. i. 92—93 という, 愛の証を研しているようだ。

ワースのレイル王はジェフリの王と較べると弱々しい所がみえる。「お前を愛してやればやるほどお前は私をないがしろにした。……お前を誰よりも可愛がったから私を姉さんたちよりずっと愛してくれていると思っていたが……。」などと愚痴っぽい。ジェフリのリアは激情を理性で何とか抑えようとする態度があった。

ワースの描いた王は, 性格のむしろ弱々しいリア王であってシェイクスピアと同時代にロンドンで上演されていた「リア王劇」<sup>⑪</sup>のリアの系譜に繋がっていると思える。

(c) Layamon

Cordoille iherde þa lasinge  
 þe hire sustren seiden þon kinge:  
 nom hire leaf-fulne huie:  
 þat heo lizen nolden.  
 hire fader heo wolde suge seoð:  
 were him lef were him lað.  
 Ðeo qeð þe alde king:  
 vnrað him fulede.  
 Iherē ich wle:  
 of þe Cordoille.  
 sua þe helpe Appolin;  
 hu deore þe beo lif min.  
 Ða answarede Cordoille;  
 lude & no wiht stille.  
 mid gomene & mid lehtre;  
 to hire fader leue.  
 Ðeo art me leof al so mi fæder;  
 & ich þe al so þi dohter.  
 Ich habbe to þe sohfaste loue;  
 for we buoð swiþe isibbe.

& swa ich ibide are:  
 ich wille þe suge mare,  
 al swa muchel þu bist woruh;  
 swa þu velden ært.  
 & al swa muchel swa þu hauest:  
 men þe wlllet luuien.  
 for sone heo bið ilazeð;  
 þe mon þe lutel ah.  
 Ðus seide þe mæiden Cordoille:  
 & seoððen set swþe stille.  
 Ða iwarðe þe king wærð;  
 for he nes þeo noht iquemed.  
 & wende on is þonke;  
 þaht hit weren for vnðeawe.  
 Ð he hire weore swa unwourð;  
 þat heo hine nolde iwurði.  
 swa hire twa sustren;  
 þe ba somed læsinge speken.  
 Ðe king Leir iwerðe swa blac;  
 swlch hit a bac clac cloð weoren.  
 iwærð his hude & his heowe;  
 for he was suþe ihærmed.  
 mid þære wræððe he wes isweued;  
 þat he feol iswowen.  
 Late þeo he up susde;  
 Ð mæiden wes afeared.  
 þa hit alles up brad;  
 hit wes vuel þat he spac.  
 Hærne Cordoille;  
 ich þe telle wlle mine wille.  
 Of mine dohtren þu were me du-rest:  
 nu þu eært me arle læðes.  
 Ne scalt þu næuer halden;  
 dale of mine lande.  
 ah mine dohtren;  
 ich wlle delen mine riche.  
 & þu scalt worðen warchen;  
 & wonien in wansiðe.  
 For nauer ich ne wende;  
 Ð þu me woldes þus scanden.  
 þar fore þu scalt beon dæd ich wene:



初期のリア王物語 三篇

fliz ut of min eæh-sene.  
 þine sustren sculen habben mi kinelond:  
 & þis me is iqueme.

*Layamons Brut*, ll. 3031—3094.

(コードイルは彼女の姉たちが王に言った偽りを聞きました。彼女は父王にまことを言い、喜ばれようと嫌われようと、偽りは言わないでおこうと正しく誓いを立てました。年老いた王はそこで彼女に尋ねました。一まちがった考えを持っていたのですが、「コードイルよ、お前から聞こう。アポロンの加護あらんことを。私の生命はお前にどれ程大切か。」するとコードイルは、はっきりと、隠し立てせずに、面白そうに笑いながら愛する父に答えました。「貴方は私の父親として大切なお方です。そして私は貴方の娘として同様です。私は貴方様に正直な愛を捧げます。私たちはとても近いのですもの。おゆるしを願って、もう少し申し上げますと、貴方は御持ちの分だけ値打があります。そして貴方が持っていていらっしゃるだけ人々は貴方を愛します。少ししか持っていない人はすぐ嫌われますわ。」このように娘のコードイルは言ってそれから黙って坐ってしまいました。そこで王は面白くなかったものですから大いに怒りました。彼女にとって父がそのような価値がなく、二人ともども偽りのお追従を言った姉たちと同じように父を敬おうとしないのは悪意によるものだ、と考えをめぐらしました。リア王の肌も顔色も、怒りのあまり黒布のように真黒にかわりました。激怒のために茫然となり、リア王はばったり気を失って倒れました。やがてゆっくり王は起き上がったのですが娘はおそろしいと思いました。怒りが爆発して王は邪悪なことを口にしました。「コードイルよ、しかと聞くがよい。私の考えを申そう。私はお前に一番目を掛けてやったが、もはやお前は一番憎い奴だ。私の領土の分け前は決してお前には与えず、姉娘たちに私の国を分け与えることにする。お前は不幸になり、惨めな生涯を送るとよい。お前がかように私を辱しめようなどとは思っても及ばなかったことだ。ゆえに私はお前を亡き者と思う。私の目前から消え失せろ。お前の姉たちに私の王国を与えよう。それで私は満足である。)

父王が己れの命とも思って大切にしているこの一番美しい娘は父王の質問、*'hu deore þe beo lif min?' (l. 3042)* に対してふざけ笑いながら答える。*'mid gomene & mid lehtre'* という個所はワースの *'...se volt gaber/E en gabant li volt mustrer.'* とラヤモンが対応させた所であろう。始めて英語にうつされたコーデリアはどのような娘になったのか。

この場面でもう一度ジェフリの描いたコルディラに戻ってみよう。姉たちとは「ちがった方法で父親の関心をひこうとして答を進めた」という言葉は、ワースではその場の雰囲気や和らげるために「冗談に紛らわして、コルディルが父にふざけて話し、姉たちのへつらいに気付かせようとした」という表現になった。「冗談を言って……」などというのはワースのフランス人らしい云い回しであろうが、ワースは父親の質問に困って、どうしてよいか分からない有様でいる瑞々しい末娘のコルディルを描き上げたのだ。ラヤモンのコードイルはまず父王の質問に対して、決して嘘偽りを言わないでおこうと心に定め、型どおりの誓言を述べてから父の前に現われる。そしてこの生真面目そうなコードイルは、はしゃいで父に答えたのである。しかしふざけて笑いながら答えた内容は *'Tant as, ... tant t'aim'* の2人称の語りかけを3人称にかえて一般的な事柄のように述べ、*'al swa*

muchel swa pu hauest / men þe wlet luuien. (ll. 3055—56) 「貴方が持っていらっしゃる分だけ人々は貴方を愛します」これに更に説明を加えて 'for sone heo bið ilazeð / þe mon þe lutel oh. (ll. 3057—58) 「何も持たない人間は人に嫌われるのです」といささかお説教風になっている<sup>⑧</sup>。ラヤモンはコーデリアの謎の言葉をわかり易くしようとして説明をつけた。このつけ加えによって、コーデリアの魅力も残念ながら減少してしまったと言わねばならない。

コーデリアの答を聞いたリア王の感情の動きはジェフリからワース、ラヤモンへと移るにしたいが、激情を増してくる。ジェフリの描写は怒れる父 'pater iratus' である。コルディラがあり余る心の思いを口にしたと考えて父は非常に激怒した。ワースでは末娘のコルディルが父を嘲ったと考えて父は激しい怒りのために顔面蒼白になる。「言葉を悪くとした」 'La parole prist de travers' とワースは説明をいれている。æstimare と amare 即ち esmer [estimate] と aimer [love] は混同しやすい言葉であったから、コルディルの言葉 '...tant t'aim' を 'So much you have, so much you're worth, of such a price you are to me.' とリアが受けとったとすれば、顔面蒼白になるのももっともな理由がある。ワースは心憎い 'dramatic skill' をみせている<sup>⑨</sup>。

ラヤモンのリア王はなお一層激情にかられる父である。コードイルが父を姉嬢同様に敬わないのは軽蔑であると考えて怒りのために顔面黒く血がのぼり茫然自失して失神してしまう。「お前はみじめな生涯を送れ、お前は死んでしまえ」とさえ言い、激しい言葉を投げかける癩癪もちのリアは激怒に狂うシェイクスピアのリアに継承される性格を東の間現わしている。

## (2) リア王の嘆き

### (a) Geoffrey

O irreuocabilia seria factorum quæ solito cursu fixum iter tenditis cur unquam me ad instabilem felicitatem promouere uoluistis cum maior pena sit ipsam amissam recolare quam sequentis infelicitatis presentia urgeri. Magis etenim aggrauat me illius temporis memoria, quo tot centenis milibus militum stipatus & menia urbium diruere, & prouincias hostium uastare solebam quam calamitas miserie me quæ ipsos qui iam sub pedibus meis iacebant debilitatem meam deserere coegit? O irata fortuna ueniet ne dies unquam qua ipsis uicem reddere potero, qui sic tempora mea sicuti paupertatem meam diffugierunt? O cordeilla filia quam uera sunt dicta illa quæ mihi respondisti quando quesui a te quem amorem aduersum me haberes? Dixisti enim quantum habes tantum uales, tantumque te diligo. Dum igitur habui quod potui dare, uisus fui ualere eis qui non mihi set donis meis amici fuerant. Interim dilexerunt me, set magis munera mea nam abeuntibus muneribus & ipsi abierunt.

*Historia* pp. 267—268.

(嗚呼、変えることのできぬ、通いなれた道を、定められた道程を歩む一連の運命よ。なぜうつろいやすいつかの間の幸福に、かつて私を引き上げようとしたのか。というのは、現在の不幸を悩み続けるよりも自分の失ったものを想うことは、より大きな苦しみのだから……。百千の戦士のまっただ中であって街の城壁を倒し敵の所領をふみにじったその日

々の記憶は、私の足下にいた者が私を哀れな状態におとしいれ、つまらぬ私を見捨てようとしているこの悲惨な災難よりなお私には辛いのだ。嗚呼、怒れる運命の女神よ、私の不幸とその日々とをこのようにまき散らしてしまった運命を自ら逆戻りさせるような日がいつか訪れるであろうか。嗚呼、娘コルディラよ、あれは何と本当の事を言ったか、私がお前に、どれ程の愛を私に対して持っているかと尋ねた時答えた。まことにお持ちになっていらっしゃる分だけ貴方は値打があり、それだけ私は貴方を愛します、と彼女は言ったのだ。要するに、私と与え得るものを持っていた間は、彼等にとって私は価値があるように見えたのだ、彼等は私の、ではなく私の贈物の友人であった。その間は私を愛したが私の進物をもっと愛した。なんとなれば、私の贈与物がなくなると彼等も行ってしまったのだ。）

姉娘たちに邪険に扱われ遂々ゴネリルによって従者は一人だけに剥ぎ取られたリア王はイギリス海峡を渡りフランスのコーデリアを訪ねようとする。王はかつて自分に備わっていた王の栄光の座、武勲に輝いた華々しい日々を思い出して嘆き、運命の女神によびかける。神慮によって定められた道をたどる運命よ、何故そんなにもはかない幸運の座に人を引き上げるのか、とリア王は怒れる運命の女神によびかけ、現在の不幸な逆境に報いる日の来ることを嘆願する。彼にとっては失った日の栄光の思い出が現実の苦境よりもなお辛いのである。チェフリのリア王は尾羽打ち枯らしても Old Magesty の誇りを持ち続けている巍然たるところがみえる。

## (b) Wace

ワースの翻訳は過去の輝かしい日々を追憶するリアの嘆きは簡単に略して、フォルチュナへのよびかけを詳しく語り、女神に生彩のあるイメージを与えた。

Dunc se prist mult a contrister  
 E en sun quer a recorder  
 Les biens dunt tanz aveit eüz  
 E or les aveit tuz perduz.  
 “Las mei, dist il, trop ai vescu  
 Quant jo cest mal tens ai veü.  
 Tant ai eü, or ai si poi.  
 U est alé quanque jo oi?  
 Fortune, tant par es muable,  
 Tu ne puez estre une ure estable;  
 Nuls ne se deit en tei fier,  
 Tant faiz ta roe tost turner.  
 Mult as tost ta colur muee,  
 Tost iés chaete e tost levee.  
 Ki tu vuels de bon oil veoir  
 Tost l’as levé en grant poeir,  
 E des que tu turnes tun vis  
 Tost l’as d’alques a neient mis.  
 Tost as un vilain halt levé  
 E tost le ras desuz buté;

初期のリア王物語 三篇

Contes e reis, quant tu vuels, plaisses  
 Que tu nule rien ne lur laisses.  
 Tant cum jo fui alques mananz  
 Tant oi jo parenz e serganz;  
 E des que jo, las! apovri,  
 Amis, parenz, serganz perdi.  
 Jo n'ai un sul appartenant  
 Ki d'amur me face semblant.  
 Bien me dist veir ma mendre fille,  
 Que jo blasmoe, Cordeille,  
 Ki dist que tant cum jo avreie  
 Tant preisiez, tant amez sereie.  
 N'entendi mie sa parole  
 Ainz la blasmai e tinc pur fole.  
 Tant cume jo oi, tant valui,  
 Tant preisez e tant amez fui,  
 Tant trovai jo ki me blandi  
 E ki volentiers me servi.  
 Pur mun avoir me blandisseient,  
 Or se trestornent, s'il me veient.

*Le Roman de Brut* II. 1909—1948.

(〔レイル王〕は曾て多く持っていたものをすっかり無くしたことを思い出し悲しみ始めました。「ああなんと、私は生きすぎた。こんな悪い目を見るとは」と彼は言いました。「私は大変豊かであった、が今はこのように貧しい。私の持っていた全ては何処へ行ったのだ？。フォルチュナよ、お前は何とうつろい易いのか。少しの間も落ち着いておれぬのだね。誰もお前を信じてはならぬ。屢お前は早く車を回し、直ぐさま顔色を変えた。お前は下に落ちたかと思へばすぐに上ってくる。お前がひいき目でみてやろうとする者は直ぐさま権力の座に引き上げお前が顔をそむけるや否や人を忽ち有から無の位置へおとす。卑しい者を高く引き上げ、忽ちまっさかさまに下に投げつける。お前がその気になれば、伯や王に何一つ残さぬのが、気に入るのだ。私が裕福でいた間は親族も従者も沢山あった。私が貧しくなると、ああ、友人も親族も従者も失った。私に愛情を示してくれる一人の供もない。私の末娘は本当に良く言ったものだ、コルディルよ、私はお前を責めた。私が多く持っている間はちやほやされ、皆に好かれるだろうとお前は言ったのだ。私はあれの言葉を聞かず、あれをとがめ、うつけ者とみなした。私が持っていた間、私は値打があった。ほめそやされ、愛された。私にお世辞を言う多くの者がおり、彼等は喜んで私に仕えたのだ。私の持っているもののために追従を言ったのだ。今や私を見ると踵を返す。』)

ワースはジェフリの女神の 'fortuna irata' を 'fortune muable' に変えた。 *irata* も *muable* もどちらも fortuna に対しての伝統的な形容詞ではある。 *irata* の同義語、 *atrox*, *bruta*, *minax*, *saeva*, *furibunda* などが古いラテン語にあらわれており *muable* の同義語でラテン語のものは *inconstans*, *instabilis*, *varia*, などが fortuna の形容に使われている<sup>②</sup>。

初期のリア王物語 三篇

うつろいやすい女神よ、お前は東の間もじっとしていることができないのだね、と女神に語りかけるワースのリア王は女神に嘆願をしてありし日の輝かしさを再び自分の手に戻したいと切望する王ではなく、むしろ彼女に語りかけることによって彼女のあてにならぬさまを自分自身に言い聞かせ、不幸な境遇の現在を嘆きながらも納得しようと努めているかに見える。ワースの女神には怒れる女神の恐ろしい姿はない。彼女は、ただ、移り気である。顔色をすぐ変えて、ひいき目でみようとする者には直ぐさま彼女の車を回し、その者を権力の座に引き上げるがふと気が変わると忽ち無の位置にその者を落としてしまう。何とも手のほどこしようのない移り気な女神の姿がワースによって形象化されて生身の女性の姿となって描出されている。リア王の嘆きも弱々しく、Old Majesty の威厳はどこかへ消えてしまったが、ワースはリアの嘆きもさることながら生々しい女神に関心があったようすで、まことに生彩のある女神をこの場に登場させている。

(c) Layamon

ラヤモンはラテンの伝統によるワースの fortuna を理解していたであろう。しかし 'fortuna' という言葉を彼は使わずにゲルマン系の 'weolla' [OE weola] (happiness, wealth) を使用した。fortuna の概念はかなり早くからイングランドに輸入されていたようである。古くはボエチウス <Boethius> のウェスト・サクソン語訳にあると言われる<sup>28</sup>。借用ロマンス語による、擬人化された fortuna と彼女の掌る車輪が英文学にあらわれる初例は *Cursor Mundi*<sup>29</sup> ca. 1300— であると OED にしるしてある。ワースの移り気な女神はラヤモンでは多くの人を騙す 'bi-swike' 女神になった。

Wela, weolla, wella;  
 hu þu bi-swikest monine mon.  
 þenne he' þe treoweðe alre best on  
 þenne bi-swikes tu beom.  
 Nis hit nowit zare;  
 noht fulle twa zere.  
 þat ich was a riche kig;  
 and held mine cinhtes.  
 Nu ich habben ibiden;  
 þat ich bare sitte.  
 wunnen biræueð;  
 wa is me on liue.

. . . . .  
 Azen ich wulle to Scotte;  
 to scone mire docter.  
 zernen hira milcea;  
 þat heo me nele wurdea  
 bidden heo me vnder-fon;  
 mid mine fif cinhten.  
 þer ich wulle wunie;  
 and þolie þeos wænen.  
 ane lutele stunde;  
 for ne libbe ich no wiht longe.

*Layamons Brut* ll. 3411—22. ll. 3432—41.

(嗚呼幸運よ、ああ、何とお前は多くの人を騙すことか。何にもましてお前を頼みとするとき、その時お前は人々を欺く。遠い昔ではない、二年にもならない以前、私は立派な王であった。家来たちもいた。今や領地を奪われて無一物に甘んじてきた。私は再びスコットランドへ、美しい娘の所へ行こう、情けをかけてくれるようお願いに。彼女は私を礼遇しないだろうが、私の五人の従者ともども迎えてくれるよう頼みに行こう。そこで私は過ごし、少しの間この辛苦を忍ぼう。もう余り長い命ではないのだから。)

ワースに現われていた fortuna の車輪は姿を消した。そして fortuna に対する conventional French diatribes<sup>⑧</sup> をラヤモンは、フランスの伝統をよく理解せぬ彼の聴衆のために除去したのだと Tatlock は説明している<sup>⑨</sup>。

ジェフリとワースでは、リア王が fortuna へよびかけて嘆く場面はリアが姉娘たちの虐待にたまりかねてフランスへ渡ろうとする直前の情景であったが、ラヤモンはその状況を少し変更した。この場面を妹娘リーガンとその夫のもとで、供回りの者を五人に減らされた時のリアの嘆きに行っている。再びスコットランドの姉娘のゴネリルの許に立ち戻り、従者を一人に減らされたリアは、そこでは fortuna へは呼びかけず死を引き合いに出してきた。「ああ死よ、死神よ、お前は私を滅ぼさぬのか」 ‘Wallan dæð wela deað/pat þu me nelt for-demen.’ (ll. 3456—57.) と。

嘆きの中にも、ジェフリのリアには、いつの日か失った王国を奪回せんとする気概がみられた。ワースのリアは自分の置かれた逆境を自分に納得させようとして諄々しい。ラヤモンのリアは最初にコーデリアに対してあらわした激情はどこえやら、嘆き悲しむ彼はすっかり弱々しくなっている。ゴネリルの許へ戻ってやさしくして貰えるよう懇願し、そこで暫くこの苦しみを耐えて過ごそう、もう長くはないのだから。と、いうリアは落胆して気落ちのした老人になってしまっている。この後ジェフリのリアはフランスに赴き恥をしのんでコーデリアの同情を求める。コーデリアはリアの体面を傷つけぬようと、四十人の騎士をひそかに送り父に侍らせ、身の回りを整えさせてから、フランス王アガニパスと共に父を出迎える。リアとコーデリアの対面はワースもラヤモンもこのようにジェフリの筋書きに従った。リアがコーデリア許しを請う時、供回りもなく余りに見窄らしくては王者の威厳に欠けると考えてか、ジェフリは孝心篤いコーデリアに供回りを送らせて体裁も整えさせた。コーデリアの前にひざまずいて許しを乞うまでに至る、リア王の激情を狂気の嵐に荒れ狂わせて、そこから深い人間理解へと昇華させたのは後年のシェイクスピアのたぐい稀な才能によるものである。これら初期のリア王の延長線上にあるリア王像としては至上の崇高な創造と言わねばならない。

### (3) コーデリアの死

#### (a) Geoffrey

フランス王、夫のアガニパスに助けられてコルディラはリアと共にブリテン国を取り戻した。リア王と夫の死後、5年間ブリテンを支配していたコルディラはゴネリルとリーガンの子息である二人の甥たちに遂に戦をしかけられ、その戦に敗れて牢にとじ込められ死を選ぶのである。ジェフリはコルディラの死を年代作家らしく、感情をまじえずに結んだ。いくさに敗れ、王国を失ったことが原因で彼女は悲しみのために自殺してしまったのだと。

Eam quoque ad ultimum captam in carcerem posuerunt ubi post ob amissionem

regni dolore obducta sese interfecit.

*Historia*, p. 271.

(またとうとう最後に彼女を捕えて牢獄に投じました。その牢で、王国を失ったために、悲しみに圧倒されて彼女は自らの命を絶ちました。)

(b) Wace

ワースはこの最後に少し詳しく説明を加えた。二人の甥がコルディルを捕え、牢に閉じ込め身代金をうけつけず長い間彼女を牢に止めて置いたので、苦悩のあまり気違いのようになって身をあやめたのだと結んだ。

Al derrain Cordeille pristrent  
E en une chartre la mistrent.  
N'en voldrent prendre raençon,  
Ainz la tindrent tant en prison  
Qu'ele s' ocist en la gaiole  
De marrement, si fist que fole.

*Le Roman de Brut* ll. 2061—65.

(とうとうコルディルをつかまえて牢に入れました。身代金を取ろうとせずに長い間彼女を牢獄に閉じ込めて置きましたので、傷心のあまり彼女は牢で自ら身をあやめました。気違いのようになったのです。)

「気違いのようになったのだ」‘si fist que fole’ と最後にワースはコルディルの自殺に対して弁護とも受けとれる言葉を入れている。自殺はキリスト教では大罪である。気が狂って自らの命を断ったのでもなければ自殺の大罪によって魂は永遠の地獄におちる。デュフリ本文に由来する多くのリア王物語の最後は、ヒロインのコーデリアに同情するあまり、彼女を死なせないような結びに変えたり、或いは最後にリア王と同じ墓に葬ることにしたり、様々な結末の物語が生まれたようである<sup>⑧</sup>。

(c) Layamon

ラヤモンは、コードイルを捕えた甥たちが拷問部屋でひどく叔母を責め怒らせたので、彼女が命を絶ったと言ひ、自殺をするのは悪い考えであるとしてつけ加えて、真面目な僧侶、ラヤモンらしい態度でしめくくりをつけた。

Heo duden hes in quarterne  
in ane quale-huse.  
heo werðede heore moddri  
mare þene heo sulden.  
þat þeo wiman was swa wroð  
þat hire sculuen heo was lað.  
heo nom enne longne cnif  
& bi-nom hire seoluen þat lif.  
Þat wes an uuel ræd  
þat hire suluen made deað.

*Layamons Brut*, ll. 3769—78.

(彼等は彼女を獄に入れ、拷問部屋に入れました。あまりにもひどく責めて叔母を怒らせたので彼女は憤り、我が身を厭ひ、長いナイフを取って己れの生命を絶ちました。自らを

殺すというのは悪い分別でありました。) Holinshed の *Historie* に見られる。コーデリアの最後, ‘... being a woman of a manlie courage, and despairing to recouer libertie, there she slue hirsselfe.’ は、ラヤモンを思わせる。

## 結 び

以上リア王物語の初期の作品三篇からリア王とコーデリアを中心にして各物語の継承の過程における受容と変容を対照してきた。ジェフリは豊かな想像力を駆使し、巧みな表現力によって気高い心を持った立派なコーデリアと、老いて逆境にあってもなお王の尊厳を失わないリアを鮮かに描き上げ世に送り出した。ジェフリが心血を注いで造り出したアーサー王もリアの血統をひくものである。リアはアーサーの先祖として遜色がない。ジェフリの *Historia* を継承したワースは叙述に巧みな詩人である。ワースの描く人物は生き活きとして生彩をもち身近に語りかけてくる迫力を持っている。運命の女神でさえ生身の女性らしく息づいている。彼の繊細な筆致で描かれたコーデリアは愛らしい娘の初々しさを強く印象づけた。後年の「リア王」の女性たちはワースから生命の息吹きを与えられたと言えぬこともない。しかしリア王はワースのフランス風の饒舌のために、デリケートではあるがいたずらに不幸を嘆き、後悔の言葉を口にする線の細い王に変貌した。ワースの *Le Roman de Brut* を翻訳してラヤモンが書き上げた「リア王」は、*Brut* 全般はさておき、この物語に限って言えば、それ程成功しているものではない。軽妙な筆さばきで描かれたワースのコーデリアはラヤモンでは真面目そうではあるけれども、瑞々しさには欠ける末娘になった。義を信条とし、最後には憤りのために刀で自ら命を断つような所のある彼女には堅さがある。ラヤモンは女性の描写に不得手であった。繊細で、複雑な感情の起伏をみせる女性を描くことにかけてはMEのロマンス作者たちはフランスの作者にまだまだ多くを学び吸収せねばならぬ時代であったのだ。リア王はワースの弱々しい王を受け継いで更に落胆の激しい王に描かれているが、ラヤモンのリアは、後年シェイクスピアのリアに現われる嵐の様な激情の片鱗を垣間見せている。斯の様にリア王物語の源泉をさぐると、作家により、時代により変容しながらも一連の系譜をたどった物語の生命の普遍性を思わずにはいられない。ジェフリの「歴史」にあらわれたリアと三人の娘たちは、歴史上の人物を離れて、文学の世界に登場することになった。父親と娘の愛の諸相をうつす heroine, 聡明で、優しく可憐であり、正義心の強いコーデリアと、老王の威光を漂わせながらも人間的な弱い心の内面をさらけ出し、短気の激情に身をまかせて、凋落の哀感をさそうheroのリア王像はこの三本の源流によってしっかりと造り上げられていたのである。

## 〔注〕

- ① Wilfrid Perrett, *The Story of King Lear from Geoffrey of Monmouth to Shakespeare*, PALAESTRA, XXXV (Berlin, 1904), p. 19.
- ② *Historia Regum Britanniae of Geoffrey of Monmouth*, ed. A. Griscom and R. E. Jones (London, 1929).
- ③ J. J. Parry and R. A. Caldwell, “Geoffrey of Monmouth,” *Arthurian Literature in the Middle Ages*, ed. R. S. Loomis (Oxford, 1959), p. 88.
- ④ Perrett, p. 10.
- ⑤ *Ibid.*, p. 11. p. 25.
- ⑥ *Ibid.*, cf. ‘Pedigree of the Story’
- ⑦ *Le Roman de Brut de Wace*, 2 vols. ed. Ivor Arnold (Paris, 1934).



- ⑧ *Layamon's Brut or Chronicle of Britain*, 3 vols. ed. Sir Frederic Madden (London, 1847).
- ⑨ Charles Foulon, "Wace," *Arthurian Literature in the Middle Ages*, ed. R. S. Loomis (Oxford, 1959), p. 95.
- Wace より先に, 1147年 Geffrei Gaimar が *Historia* をアングロ・ノルマンの *Lestorie des Engles* に訳しているがリア王物語の部分は現存していない。
- ⑩ Layamon は *Brut* の原典に Wace の書物を使用したことを述べ 'Frenchis cler' の Wace が エレオノール妃に書を献呈したとするしている cf. *Brut*, ll. 37—44.
- ⑪ 'Romanz' は 'La langue vulgaire, par opposition à la langue savante, le latin.' であった。ラテン語を理解しない人々のためにロマンス語 (即ち古フランス語, アングロ・ノルマン語) で書くという但し書きは Hue de Rotelande の作品 *Ipomedon*, ca. 1175 にも見られる。'Si li latin n'est translatez' / Gaires n'i erent entendanz; / Por ceo voil jeo dire en romanz / A plus brevement qe jeo saurai / Si entendrunt et cler et lai. (ll. 28—32).
- ⑫ Arnold, p. lxxix.
- ⑬ *Layamon's Brut*, ll. 11—20.
- ⑭ Madden, p. p. xxiv—xxv.
- ⑮ R. S. Loomis, "Layamon's Brut," *Arthurian Literature in the Middle Ages*, p. 105.
- ⑯ Perrett, p. 229.
- ⑰ S. T. Coleridge, *Shakespearean Criticism* (Everyman's Library, London, 1960), I, p. 54.
- ちなみに, John Milton が後年自由訳した Geoffrey の *Historia* は次のようであった。
- ... But Cordelia the youngest, though hitherto best belov'd, and now before her Eyes the rich and present hire of a little easie soothing, the danger also and the loss likely to betide plain dealing, yet moves not from the solid purpose of a sincere and vertuous answer.
- Father, saith she, my love towards you is as my duty bids; what should a Father seek, what can a Child promise more? they who pretend beyond this flatter. When the old man, sorry to hear this, and wishing her to recall those words, persisted asking, with a loial sadness at her Fathers infirmity, but somthing on the sudden, harsh, and glancing rather at her Sisters, than speaking her own mind, Two waies only, saith she, I have to answer what you require mee; the former, Your command is, I should recant; accept then this other which is left mee; look how much you have, so much is your value, and so much I love you. Then hear, thou, quoth Leir now all in passion....
- ⑱ Arnold, p. 797.
- ⑲ *The True Chronicle History of King Leir and his three daughters, Gonorill, Ragan, and Cordella*. (London, 1605), in *The Malone Society Reprints* (Oxford, 1907).
- ⑳ ラヤモンはワースを訳す際に, この場面の状況をよく理解していなかったのではないかと Perrett はつけ加えている。pp. 229—230.
- ㉑ John Orr, "On Homonymics," *Studies in French Language & Mediaeval Literature presented to Professor Mildred K. Pope*, pp. 277—278.
- ㉒ H. V. Canter, "'Fortuna' in Latin Poetry," *Studies in Philology*, 19 (1922), pp. 72—73.
- ㉓ 黒瀬保, 「運命の女神—中世及びエリザベス朝文芸におけるその寓意研究」, (南雲堂, 1970), p. 42.
- ㉔ *Cursor Mundi*, 5 parts, ed. Richard Morris (EETS. OS., 57— Oxford, reprinted, 1961).
- Dame fortune turnes þan hir quelle/And castes vs dun vntil a wele. .
- ㉕ J. S. P. Tatlock, *The Legendary History of Britain* (Los Angeles, 1950), p. 489.
- ㉖ *Ibid.*
- ㉗ Perret, pp. 240—242.